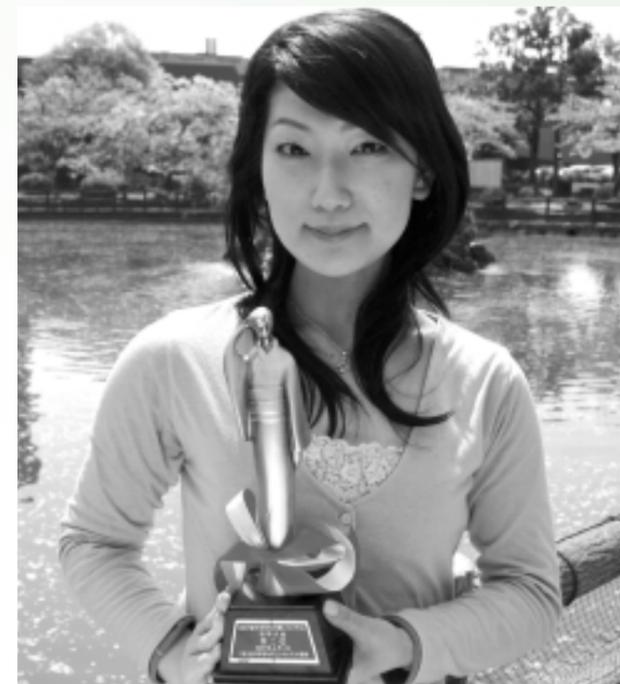


最初は着物に慣れようかなあと・・・  
でも今は着付けのコンサルタントが目標です



中村理香さん(21歳・新田町)

昨年11月23日に行われた着付けの早さや美しさを競う「全日本きもの装いコンテスト・きものフェスティバル東海中部大会」振り袖の部で最優秀賞の「きもの装いの女王」を受賞。4月1日に行われた「日本の心と美の祭典・きもの装いコンテスト世界大会」振り袖の部でも第2位を受賞。

——着付けを習い始めたきっかけは？  
きっかけは母に勧められて。最初は、着物に慣れようかなあとというくらいの気持ちでした。始めた時期は昨年の4月からだったと思います。

——実際にやってみてどうでしたか？  
最初は、名古屋帯の枕を乗せるだけで肩が痛くて…。何でこんな大変なこと始めちゃったんだろうと思いましたが、きちんと装えるようになってからは、楽しくなりましたけれど。

——普段の練習はいつ？  
岐阜県の大学に通っているのですが、午前6時台に家を出て、授業が終わるのが午後6時。帰ってきてから9時過ぎまで練習をします。練習を始めたころ

は週に1日くらいのペースでした。東海中部大会があったのは、11月。9月には教育実習があったので、毎日練習をするようになったのは大会の1か月前くらい前からです。

——東海中部大会に出たきっかけは？  
練習を続けるうちに着付けの先生から勧められて。それで、出場する以上は、恥をかかないようにしなきゃと思つて、一生懸命練習しました。でも、大会の前日まで、いつもどこかが上手くいかない状態でした。

——その大会の結果は？  
本番は、いつもと違う不思議な感じでした。奇跡が起こったとは思えないくらい、今までのなかで一番上手に

## 筆者のつぶやき

名前と写真を見て、「おやっ」と思った人もいるでしょう。そう、彼女は昨年のミス七夕なんです。昨年は、大学の授業の合間を縫って、ミス七夕としての仕事、そして着付けの練習とハードスケジュール。限られた練習時間で臨んだ大会で起こった「奇跡」は、大舞台に強い「集中力」のためものかもしれませんね。



中央が中村さん

装うことができたのです。それで、最優秀賞をいただくことができました。

——今後の目標はありますか？  
今は、世界大会も終わり、着付けのコンサルタントの資格を取るための練習を週に3日ぐらいしています。前は浴衣も着ることができず、母にさせてもらっていましたが、今ならたぶん、自分で装えるはずですよ。帯はちょっと自信がないですけど(笑)。

# あんじょうみであす

## その37 ななつ井 七つ井



今月の案内人  
浅井宏康さん(安城町)



安祥城(安城町)の周辺に7つの井戸跡があります。昔、この辺りは湧き水が多く、その中でもきれいな水の出る井戸7つが「七つ井」と呼ばれていました。それぞれ名前を柳井・桜井・中井・筒井・浅黄井・風呂井・梅井といいます。井戸は素掘りできていて、昭和30年ごろまではコンコンと水が湧き出ていました。わたしが実際に水を飲んだこと



あるのは、筒井と梅井です。梅井は南部小学校へ通うあぜ道沿いにあり、通学の途中にのどが渇いて飲んでいたいことを思い出します。現在は、以前あった場所とは違い、近くの南部小学校の体育館の東側に梅井の石碑だけが残されています。

筒井は、今よりもっと低い位置にあり、階段で降りて、水を使っていました。この水は、本当においしく、茶道でも使われていたと聞いています。また、名前の由来としてこんな話が伝わっています。天文18年(1549年)織田家・今川家間で人質交換が行われ、竹千代(後の徳川家康)が岡崎に帰る途中、安祥城に立ち寄りました。そして、筒井の水を飲んだ竹千代は「ぜひ持って帰りたい」と喜び、竹の筒に入れて持ち帰ったそうです。

かつては豊富な水量を誇った「七つ井」もほとんどが同じ時期に枯れはじめ、今では井戸の面影はなく、石碑だけが残っています。また、本来の場所に残っているのは筒井だけです。

「七つ井」の存在が今では影も薄くなってしまいました。時代の移り変わりで仕方ありませんが、少しでも後世に歴史文化として伝え、大切にしていきたいと思っています。